




俺は恋ノ
催淫アプリ
で
わからせ
調教したい

「俺はメスガキ♂（恋人）を
催淫アプリでわからせ調教したい」



P03

「俺はメスガキ♂（恋人）を催淫アプリでわからせ
調教したい」冒頭サンプル

P34

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル



「俺はメスガキ♂(恋人)を催淫アプリでわからせ調教したい」

俺が高校1年の春休み、オンラインゲームで「ヒロ」……相沢浩則という男に出会った。

趣味が似ていて話が合う同じ学生だと言うその男とは気づけば毎日遊ぶようになり。平日の夜中まで、休みの日は朝から晩までボイスチャットしながらゲームをしていた。

次の年の夏頃、ゲームがサービス終了になり、浩も受験があるのであまり遊べなくなるという話になり、はじめて浩が中学生だということを知った。ゲームの中だけではなくもっと仲良くなりたいと思った俺は、オフで会うことにした。

オフで会ってからは特に距離が近くなった。家が近かったこともあり、毎週のように俺の家で遊んでいた。

浩が高校を卒業して、大学に行っても……社会人になっても。ほぼ毎週それは変わらないし、休みが合う日は俺の家に泊めて朝まで遊ぶことも多い。

浩は、目つきも口もめっちゃくちゃ悪くて、ボイス

チャットでゲームやってた時なんて敵に罵詈雑言の嵐だったし。

でもいい奴だ。味方批判は絶対しないし、基本は一生懸命カバーにまわることが多い。割と丁寧に立ち回る。

ゲームでなくても浩から人の悪口を聞いたことはなかったし、人が落ち込んでいたら絶対に励ましたり優しい言葉をかけてくれる。

それに、割と人見知りだ。初対面の相手と話すのは特に苦手なようで、空気を読んで静かになってしまう。

でも「直紀とは初めから話しやすかった」なんて言って俺と一緒にの時はすごく楽しそうに話すのだ。

俺も浩もオタクなので、ゲームのこととか漫画とかアニメとか、昔から同じような話しばっかりしてるが、浩と話せばなんでも楽しい。

彼女がいたことが何回かあったが、浩と遊ぶほうがずっと楽しくて浩を優先するので毎度「男友達の方が大事なの？」と問われて「そうだけど」と即答し、振られ続けて、大学の時の彼女に「ホモ」と罵倒された時にはっと「それだわ」と気づいた。

それからは時間をかけて浩を落とそうと、かな

り前向きに隙を狙っていた。恋愛事で本気で落とそうと思ったのは浩だけだ。

そうして隙を狙い始めて、気付けば五年程経っていた。

その日の浩の様子はどこかおかしかった。

昨日の夜、いつものように俺の家に来て朝までゲームをする予定だったが、突然別件で面倒なことに巻き込まれて急遽今日の昼から遊ぶことになった。

連絡を取ったとき浩はいつも通りだったと思うのに、家の中に来た時の浩は何か強張った様子で、俺の家なんて何回も来てるし、今更緊張することもないと思うのだが。

ゲームがはじまればいつも通りに見えた。

「くっそこのやろ、くたばれえええ！！」

「あんまり突っ込みすぎるなって！オイ！」

「あっ、ごめんなさい調子に乗りましたっ！！あああ許してえええっ！直紀いごめん死ぬうううあああ！！」

「浩おお死ぬなああ！生きろおおお！！」

「あっ生きたあ！直紀ナイスウ！」

オンラインの対戦ゲーム、チームに分かれて戦う。浩は基本人に合わせることが多いが、俺と遊ぶ時は気を使わずに、好き勝手していることが多い。

俺に気を許しているから、こちらの方が本来のプレイスタイルなのだろう。心底楽しそうにやっている浩の様子が、俺は好きだった。

「うお——勝った——俺つえ——」

「いや、だいぶボロボロだったぞ……」

「勝ちゃあいいんだよお！」

そう言ってコントローラーを置いた浩の顔は、今日はなんだか、少し無理をしているようにも見えた。いつもはもっとテンション高くて、本当に楽しそうなのに、今日だけはどこか暗いというか、元気がないように見える。

どうしたんだろう？何かあったんだろうか。

一旦ゲームをおいて、お手洗いで用を足して戻ってくると浩もゲームを止めていた。普段ならソロでも遊んでるのに。

「どうかしたのか」

いよいよ様子がおかしいと思ったので聞いてみると、浩は一瞬目を泳がせて言いづらそうに口を開いた。

「お前……俺とばっか遊んでて、大丈夫なのか……？」

「何？」

「昨日……お前の会社の近く通りかかったら、お前と彼女が一緒にいたから……彼女に悪いんじゃないのか……？」

「なんだって？」

彼女ってなんだ？俺に彼女はいないし……浩にも彼女はいない。俺がほぼ独占して、作らせる時間を与えなかったし。でも、そもそも浩の俺以外の交流関係って、浩自身話しながらないのもあって、聞いたことがなかったな……俺が知らない間にまさか知らない奴と！？

混乱した頭を落ち着かせていると、浩が続けた。

「お前に彼女いるなんて知らなかったから……水臭えぞ～、できたなら言えばいいのに」

「俺に彼女？……昨日？」

「まだしらばっくれるつもりかよ！」

考え込んでいると浩が勝手に話を進めていく。

ゲーム中は傍若無人だが、話をする時は主に聞き手に回ることが多く、また十年程一緒にいるがこんな風に機嫌が悪いとか、怒っているようなと

ころを見たことがなかった。なので、こんな浩は珍しい。

「いただろ……飲み屋の横で、泣いてる彼女抱きしめてやってただろ……」

「ん……？あ、ああ……」

頭をフル回転させて、昨日のことを思い出す。

本来だったら浩と遊ぶ筈だったのに、昨日は本当に突然面倒ごとに巻き込まれたのだ。

「多分それ姉ちゃんだわ、昨日彼氏に振られて凹みまくって泣きつかれたから」

「は？」

やっと何を言われているのか理解して返答すると、今度は浩が思考停止していた。

俺の言葉を自分の中で反芻させるように繰り返し替えたあと、やっと理解したのか、再確認するように聞いてくる。

「あの……そろそろ結婚するって言ってた？」

「そうそう、アイツ昨日俺ン家に無理やりやってきてさあ、朝までずっと飲んで……今日も、昼からお前が来るってのに……」

俺がブツブツと文句を言っていると浩が真剣な顔で、心配そうに眉尻を下す。

「……お姉さん大丈夫なのか？婚約者じゃないのか？」

「姉ちゃんが結婚する～～って言って振られるの三回目だしな、朝になったらピンピンして元カレの悪口言いながら出て行ってたから大丈夫だよ……」

浩は何度か「そうだったのか……」と安堵したようにうなづく。

それと同時に「お姉さん、大丈夫ならよかった……」なんて人の身内の心配なんてしてくれる。

「……ってわけで、俺に彼女はいないんだけど」

まあ、「彼女」をつくるつもりは無いんだが。

「ン……そう、だよな……彼女ができたら説明してくれるもんな……」

浩は少し考えて、手にもっていたものを俺に渡してくれる。

「そっか……うん……ごめん……これお姉さんのかな？」

パールのイヤリングだ。姉ちゃん、そういえば今朝「無い！」って言って大騒ぎしてたな。

……浩が俯くと、前髪で顔が隠れる、その顔が見たくてイヤリングをもっていた手首を掴んで引っ

張った。

「な、なに？」

浩は、今にも泣きそうな顔で俺を見つめていた。

俺の中の何かが外れてしまったように止まらない。その白い頬を撫でる……冷たい感触だった。

「イヤリング見て、俺が彼女連れ込んだんだと思った……？」

引き寄せて顔を近づけると、顔を隠すように背けられる。少し強引に顎をつかんでこっちに向かせた。

「うあ……」

唇が触れるか触れないかの距離、鼻同士が触れ合ってしまうような距離で、吐息がかかるほど近い。

それでも浩は視線を逸らす。けど、頬が赤く染まっていく。

「……もし、お前に彼女ができたら、俺が邪魔になんだろ……」

絞り出すような声でそう言う。

俺は掴んでいた顎を離して、頬を両手で挟んでもう一度浩の顔をこちらに向かせる。

「俺に恋人ができたら、いや？」

「いや、じゃねえよ……ちゃんと……応援してやりたいって……邪魔したくねえし……」

普段割とハキハキと喋る癖に、歯切れが悪い。こんなに近いのに、浩は視線を合わせてくれない。

だからわざと耳元で囁くように言うことにした。耳に息がかかるくらい近づいて、そのまま耳に軽く噛むみたいにキスをする。

「んっ……なに、直っ……」

ちゅ、と音を立てて離すと浩の肩がビクリと跳ねた。

「俺は、恋人欲しいけど……お前は欲しくねえの？」

「……っ俺は、」

俺の言葉に浩の身体がびくって震える。

逃がさないように両手で頬を包んで真っ直ぐ見ると、少し赤みがかった瞳の奥がじわりと濡れた。

言葉もなく唇をふるわせて、傷ついたって顔……こんなにしてもまだ気づいてないこいつが、かわいい。

「俺は……欲しいよ」

浩の唇に触れるだけのキスをする。

泣きそうだった浩が呆然とした顔になる。

その口が何か言いたげに開く前に、また塞ぐようにキスをした。

「ん……っ」

そして、浩が何かを言おうとして口を開く度に、それを口で塞いでしまう。

キスを繰り返すたびに、浩の瞳がどんどん潤んでいく。泣きそうだったそれではなくて、とろりと蕩けたような目になっていくのがわかった。

「んっ、ま、待て、ちょっ、っ……直っ……」

浩の手が、俺を押し返そうと押し付けられたが力が籠められることはなく。

舌をいれるわけでもない、ただ唇を合わせるだけの子供みたいなキスを何度もするうちに、浩の身体から力が抜けていくのがわかる。

崩れ落ちそうになる腰を片手で支えながら、もう一回唇を重ねたあと、至近距離のまま目を見つめて言う。

「浩……」

「は……あっ……直紀っ……」

その目は俺と同じだ、嬉しいって顔してる。

……そうだったらいいいなってずっと思ってたけど、本当にそうだったんだなって嬉しくなる。

けど、浩はすぐにぎゅって唇を閉ざした。

「なんで、こんなことすんだよっ……俺たち友達なのに」

「だって、お前のこと……んぐ」

浩の手が俺の口を塞ぐ、言うなってことだ。

口を塞がれていて何も言えないかわりに、そのまま浩を抱きしめようとする、浩は引き剥がすように押し返してきた。

そのまま、俺から逃げるように後ずさってソファの側面に背中をくっつけて丸まってしまう。

「友達だったらずっといられるだろ……お前に彼女ができて結婚しても……だから」

「お前が好きなのになんで他の奴と付き合わないといけねーの？」

びくって浩が身体を強張らせた。

せっかく止めたのに、今それ言う？ありえねーだろ！って顔してるけど……もう今更俺は止められない。明らかに俺と、浩の気持ちはおんなじなんだし。

「俺はもうお前のこと逃がしてやれそうにないんだけど」

決定的な一言を突き付けて、もう逃げられない

ようにしてやらないと。

普段は俺よりもずっと背の高い浩がこうやって丸まってるのちっちゃくてかわいい。

「俺は……お前が欲しいよ」

「なんだよ……俺は、モノじゃ…ねえぞ……っ、」

その身体に覆いかぶさるようにして抱きしめる。暫くだんまりの浩にそうしているともぞりと身体がうごいた。

「……しょうが、ねえやつ……だなあ……」

腹を括ったのか消え入りそうな声でそう言って、浩が背中に手を回してくるのがわかった。

それが嬉しくて抱きしめ返すと、おずおずといった感じで浩の腕にも力が入ってぎゅっと抱きしめられた。

「浩……」

「直っ……ン、」

顔を上げて、また浩にキスをする……今度はさっきよりも深いやつ。

唇を合わせると、鼻から抜けるような甘い声が出てたまらない気持ちになる。

浩の両腕は俺を抱きしめていて、もう逃げようとはしてないってわかったから、だから俺も遠慮

なんかしないで繰り返しキスを続ける。

「んっ……ふ、うっ……」

やっと浩と恋人同士になったんだって思ったら、なんか抑えられそうになかった。

さっきとは違う、優しいキスじゃなくて、もうこいつは俺の、ってキス。

唇を吸って、舌を差し込むと少し開く。そこに舌を差し込んだ。

「ん、ふ……っ、うっ……んっ、」

もう浩は逃げる様子ではなかったので、後頭部に回した手で優しく髪をなでる。逃げる舌を絡め取って、口の中を舐めまわしてやる。

くちゅ、ぴちゃ、という水音が響いて、それに反応するように浩が肩を震わせるのがたまらない。

最初はキスするだけでいいって思ってたのに、キスのたびに反応してくれる浩がかわいすぎる。

「浩……ひろ……」

「ん、う、っ……なお、きい……」

そのまま浩の上に乗り上げる、浩のシャツの中に手を入れて、胸をそっと撫でるとまたびくって小さく身体を跳ねらせてかわいい。

もう我慢できそうにない……だってもうずっと

我慢してきた。ずっと浩に触りたいと思っていたのだ。浩は何も知らないだろうが、浩が俺の家で泊ってた時も抱きてえなあ、って思ってたし。それでも我慢してた俺って結構紳士なのかもしれない。

「ふぁっ……う、直っ……もうすんの？」

「うん……いや？」

付き合っ即セックス、浩は結構奥手だろうし……ゆっくりこの先に進みたいって思っているのかもしれない。

でも、俺は今、浩を抱きたい。

浩はううんって暫くうなって悩んだのちに、ぎゅって俺の胸板を押した。

「……ちょっと用意してくるから……バスルーム借りても、いい？」

つまり……そういうことだ。

裸で抱き合っキスをする。

肌が触れるだけで気持ちよくて、お互いの鼓動とか体温をもっと感じたいって思う。

「ん、うっ……ぷあ、……はあ、っは……お前さあ……」

ベッドの上でやっと俺に唇を開放してもらった浩はくったりとしていた。呼吸できなくて少し苦しかったのだろう、瞳は少しうるんでいるように見えた。

浩の首筋に顔を埋めて、耳の裏から首筋、鎖骨にかけて舌でなぞるように舐めると浩が身体を震わせる。

「キス、苦しかった？」

「いや……別に……いいけど。こっちは恋愛初心者なんだから優しくしてくれよ」

浩は高校の時に一人恋人がいたはずだが、初セックスで失敗したようで、すぐに別れてしまったようだ。何故失敗したかは聞いていない。

俺も、高校の時は告白されて付き合った彼女もいたし……でも浩が好きだなんて思ってからは女に告白されても付き合おうなんて一ミリも思わなくなっていた。

「俺だって男はじめてだし……こんなに片思いでずっと好きだったの、お前だけだし」

浩は少し照れたようにしながらも顔を綻ばせた。

その俺の頭をぎゅって抱きこまれる。それから

小さな声で、浩が言うのだ。

「俺、も……ずっと前から……だから」

可愛い、好きだ、浩が俺を好きになってくれたことが嬉しい。

キスをしながら、同時に胸板を撫でる。浩は骨が少し浮いてるくらい痩せている。

女の子と違って柔らかくないし、おっぱいもない。女性の柔らかい身体とは全然違う。けど、それでも浩の身体だと思うと興奮するし一番そそられる。触りたくなる。

首に口づけて吸いあげてから、そのまま喉、鎖骨にもキスをしながら胸元までおろしていく。

胸を撫でていると、ふわふわしていた乳首が手のひらの下で硬くなってくるのがわかった。親指で転がすように触ってやると、くすぐったいのか身を振らせる。

「ん、あっ……そんな、とこっ、触っても面白くない……だろっ」

「ふ……楽しいけど」

指の間ですり潰すみたいにしながら引っ張ると、すぐに硬くなってくるのがわかる。

コリコリとした感触が楽しくて親指と人差し指

で摘まんだり弾くみたいにすると、びくんって身体を跳ねらせるのがかわいい。

「きもちいいのか……？」

「わか、んねっ……くすぐって、え……」

胸の中心を舌で舐めながら、もう片方を指でつまむようにしてくりくりとこねる。

びくんと身体が跳ねて、声が漏れるのが可愛くて何度も繰り返すうちに、少しずつ声が大きくなっていくのがわかった。

乳首だけでこんなに反応するのかと思ったらなんだかすごく興奮した。

「ん、うっ……」

「なんで、声出せよ」

漏れる声が恥ずかしいのか唇を閉ざしてしまう、その口に指を突っ込むと俺の指を噛まないように口を開いた。

口内に指を入れて舌をつまむ、舌の付け根あたりを撫でてやると、びくびくと腰が跳ねるのがわかった。

「んあ、あっ……ひっ、うっ！」

浩の乳首は突起して、俺の唾液で濡れて卑猥だった。

どんどんえっちになっていく、身体も声も表情も……全部いとおしい。

「直紀っ……あんまり、見んなよ……」

「なんで……？」

「俺の身体見てると萎えるだろ……？」

そんなこと言ってるコイツがかわいくて、俺がどれだけ興奮してるか教えてやりたい。

浩の手を掴んで自分の逸物へと導く。

硬くなって熱くなっている俺のものに触れて、驚いたように俺の顔を見上げていた。

その顔が真っ赤になっていて、恥ずかしそうな表情がたまらなかった。

「この通り、ガチガチですけど？」

「え……え……マジでえ……？」

浩は信じられないといった様子で恐る恐るさわってくる。

浩の手に撫でられて、それだけでイキそうなくらい気持ちいい。

根元に力を入れて、わざとぴくんぴくんって動かすと驚いたみたいに声を上げる。

可愛いな、浩。

「マジで……もうはやくお前の中に入りてえの…

…」

「そっ……かぁ、そんなに……なんだ……」

ぎゅうって抱きしめると俺の胸元に顔を埋めてくる。

やっぱ……ケツ掘らせろって言ったら怖いよな。

今日は我慢できる、浩が怖がることや嫌がることはしたくない。

そりゃあ、抱きたいに決まってるけど……こうやって肌が触れるだけで結構満たされるってわかったし……。

「いい、よ……最後まで抱いても」

「……ホントに？無理してないか？」

浩は口は悪いけど優しいから、人の為なら自分を犠牲にできる節がある。

だから無理させてまでは抱きたいとは……うん、思っていない。俺紳士だから。

浩の手が俺の手を掴む、そのまま浩の後ろに誘われて窄まった場所に案内された。

「っ……、俺も」

そういえば、シャワールームに入ってた時間が結構長かったなあって思った。

浩の後ろ穴に指が簡単に入る……だけじゃない、

熱くてとろとろになって、俺の指をきゅうって締め上げてくる。

「期待してた……からっ……」

時間をかけてちゃんと洗浄してきて。

多分風呂場の入り口に置いてあったボディーローションだろうけど、それまでちゃんと仕込んでたなんて教えられて。

ここで抱かなければ、男じゃないんじゃないかって思ってしまう。

「俺は大丈夫だから……」

唇に何度もキスをしながら、ベッドサイドの引き出しからローションとゴムを出す。

「……昔の彼女と使った残り……？」

「いや、お前をいつか抱くときの為に買ったやつ」

「ふは、ははっ！準備万端ですねえ……」

一瞬不安そうな顔をしたのに、俺の言葉ですぐに笑顔になる。

ローションはちゃんとアナル用の濃度の高いものだ。今までは時々俺の息子くんに使ってたけど、これからは浩にだけ使うだろう。それに手に取って、冷たくないように暖める、それからそれを押し

込めるように浩の中に二本の指を押し込んでいく。

「んあ、あっ……うっ……」

ぐち、ぐちって指でかき回す。本当はうつ伏せの方がいいみたいなのだが、浩の顔が見たいので仰向けのまま。

ぐちゅっと音を立てて指を引き抜くと、浩は切なげに息を吐く。

「ちゃんとっ……慣らしてるからっ……いいからっ」

浩が膝裏を抱えて尻を持ち上げる。尻肉を両手で掴んで、左右に広げるとひくつく窄まりが見えた。

そこに顔を近づけると、ひくんと穴が動くのがわかる。舌を伸ばして舐めると、きゅっと締まるのがわかった。

「ひ、ううああっ！だめっ……汚いからっ、舌、いれちゃ、ああっ……！」

だって、こんなエロい穴見せられたら舐めるに決まってるだろ。

浩はいやいやと頭を振って俺の頭を引き剥がそうとしたが、その手首を掴んで続ける。

「あう、ううっ！だめ、えっ……直お……」

襷を舌先でなぞって、それから中に押し込むようにする。

熱い中がうねって、舌が締め付けられるのがわかる。穴の縁を舐めたり吸ったりしているうちに、どんどんそこが広がっていくのが分かる。

指も足して更に広げて舌と指を交互に押し込んでいく。

「あ、あ、ああっ……直っ、なお、おっ……」

まるで猫の鳴き声みたいに可愛い。俺は興奮しすぎて、これだけでイきそうだった。

浩の方をちらりと見あげるとぐすぐすと泣きじやくっているのが見えて、慌てて離す。

「ごめん、しつこかったよな？痛かった……？」

「違うっ……直っ……やだっ、もっ……もう、ここ……はやく欲し、いっ……」

ふりふりとお尻を振られて誘われると頭がおかしくなりそうだった。

俺、もっとちゃんと用意して、紳士的に我慢するつもりだったんだけどな。

ゴムを一つ手に取って、開ける。手早く装着する、その俺の一連の動きを浩がじっと見つめていた。

「ひっ……うっ……」

指で広げたそこに、俺の先端をあてがうと、浩は身体を硬直させる。その様子に落ち着かないといけなと再度息を整えた。

「本当に、いいのか……？」

「は……だいじょ、ぶっ、だって……来いよ……それともなんですか？ 怖気付いちゃいましたかぁ？」

こういう時でもこいつらしいというか、なんというか。

少し震えている手を握る、指を絡めて、それからゆっくりと腰を進めた。

「浩っ……」

「ひ、あっ……あ、直お……っ」

先端が飲み込まれていく、きついけど、柔らかくて、暖かくて、気持ちいい。

一気に奥まで突き入りたい衝動を抑えて、ゆっくり、ゆっくり、傷つけないように、慎重に進めていく。

「ひぐっ、う……ッ！」

けれど、指とは違う質量に、浩は苦しそうに息を詰める。

俺の下で痛みに耐えてその身体を硬らせて小さく震えていて、その瞳は濡れていた。

「浩……大丈夫……か？」

「どーってことっ……ね、えっ、よっ……うぐっ、
ううっ……」

どう見ても大丈夫ではないのに、それでも必死に虚勢を張る。

それは普段の姿からは想像もできないくらい弱々しい姿は、繊細で壊れやすいものにみえて。

俺を受け入れる為に耐えてくれる健気な恋人が愛おしくて。ただひたすらに優しくしたくて、大事にしたくて。何度もキスをしながら頭を撫でた。

「いいから、動いていいからっ……」

「二人で気持ちよくならねえと……」

浩の萎えてしまったモノをそっと手で包む、上下に擦ると少しずつ反応を示し始めた。

同時に中の浅いところを亀頭で擦りあげる。

「いいから、俺のは触んなくてっ……い、からぁ…
…」

前立腺の辺りを狙って腰を打ち付ける、その度に浩の身体が跳ね上がる。俺の首に腕を回してきて、足を腰に巻き付けてくる。

密着すると、お互いの腹の間に浩のものが擦れて、更に硬くなるのを感じた。

浩が自分から腰を揺らし始める、無意識なのか、意識的なのかはわからないが、それが凄くいやらしい。

乳首をくりくりってするとナカがきゅんきゅんって俺のものを締め付ける

「あうっ、あ……あ、っあっ、直紀いつ……直おっ……」

結合部からは粘着質な音が響く。

浩の声も、肌の感触も、全部が俺の興奮材料にしかない。

肉体的な快樂よりも、触れ合って繋がってお互いの熱を感じているのが気持ちよくて。

浩の手が、俺を確かめるように背中を撫でるのが愛おしい。

「俺のなか、ちゃんとっ……きもちいい……？」

「うん……お前ン中……すげえ気持ちいいよ……」

「よかつ、たあ……直っ……なお、っ……ん、ふ、うっ……」

頬を撫でるとその手に頬を寄せて、辛いはずなのに柔らかく笑んでくれて。俺を呼ぶ浩の声は甘くて。

乳首を指で摘まんだり、浩のチンコを優しくこ

すり上げると小さく喘ぐ浩が可愛くて。愛おしさがこみ上げてくる。

「はっ、あっ……俺、も……いきそおっ……直、いきそっ……んあ、あっ、直っ……なおっ……！」

「いいよ、イケよ浩……俺も、もうっ……出るっ……」

「んあ、あっ……あ、ああっ……！」

浩のチンコを裏筋に指をあてたまま根元から絞るみたいにしてこすり上げるとびくびくびくって身体を震わせて射精した。

それに合わせるかのように中がうねって絡みついてくる、その刺激に俺も限界だった。

「イクっ……っ……！」

「ひあ、……あああっ……！」

浩の奥に押し当てたまま、ゴム越しに射精する。

その刺激にびくびくと震える浩の身体を抱きしめながら、最後の一滴まで絞り出すように腰を揺らす。

「ふあ、……あ……なお……ン、っ……」

「ひろ……」

頑張ってくれた浩に、優しくキスをする。唇の柔らかさを感じて、舌を柔らかく絡める。

そうして、浩の全部を堪能してからゆっくりと浩の中から自身を引き抜く。

「ん、あ……っ、」

ぶるって震えて、切なげな声を上げるのでまた勃起するところだった。

ゴムの中にはたっぷりと精液が溜まっていた、それを外して口を縛ってゴミ箱に捨てる。

「なお……」

まだ余韻に浸っている浩の隣に横になって、汗で張り付いた前髪をかきあげて額にキスをする。

嬉しそうにふにやりと顔を緩める浩がかわいくて、その身体を抱きしめながら多幸福感に満たされていた。

くしゃっと髪をかき混ぜると少し照れくさくて視線をそらされる。

「……なんか、直紀さん……はやかったですねえ……」

「ン？」

まだ息も整ってないのに、甘酸っぱい空気に耐えられなくなったのか、ちらりと横目で見ると悪戯っぽく笑う浩の顔があった。

「もしかして早漏……」

「違うぞ、俺はどっちかってと遅漏だぞ」

「ええっ……その割にははやかったような」

「よしわかった、俺が絶倫ってところ今からお前の身体に教えてやるからな……」

「えっ……あれ、もう勃起して……あ、あれっちょっと待ってくださいよ直紀さあんジョークじゃないですかああ！」

ちょっと煽っちゃって焦っちゃう浩を可愛がりながら。

そんなやりとりをしながら、多分、俺と浩則はこの先もこうやって穏やかに恋人の時間を過ごすのだと、思っていた。

その一年後、俺はギシギシと軋むベットの上でその恋人に騎乗位で犯されていた。

「ッ、あ……う……！」

「直のまたビクビクしてるぜ、もうイっちまいそうなの？」

ぱちゅ、ぱちゅっと力強く振り下ろされる尻肉、きゅうきゅうっと締まる肉壺。

後ろ手に玉を軽く揉み上げられると腰が勝手に跳ねて、背筋を走る快感に声が出そうになるのを唇を噛んで堪えた。

「ほーら、俺のケツマンコで扱かれんのイイんだろ？またびゅっびゅ♡しちゃえよソーロー♡」

「ッ〜〜……！」

俺の太腿に手をついて、身体を少し後ろに沿った結合部が丸見えのいやらしいポーズで。

淫らなダンスを踊るように腰を振って、挑発するようにこちらを見下ろしてくる。

歯を食いしばって必死にイかないように耐えるが、もはや雄を受け入れる器官となった浩のアナルは容赦なく搾り取ろうとしてくる。

俺の弱点を全て把握したその動きに抗う術はなかった。

「頑張って耐えてんなァ……♡クソザコチンポの癖に偉いな、ナーオ……♡」

「う、ぐ……ッ！」

わざとらしくゆっくりと焦らす様に抜いていく愛しい人の秘所。亀頭が抜けてしまうギリギリまで引き抜いたあと、一気に奥へと突き入れた。

ばちゅん！という音と共に叩きつけられる尻肉。

同時にぎゅうっと締まった媚肉に包まれながら射精してしまった。

「っ……ッ！」

「びゅーってえ……♡直のがいっぱい出てるう……♡オマエのザコチンポミルク……俺ン中で卵子探してる……♡カワイソー♡」

このまま余韻に浸りたいところだが、浩はそれでは終わらない。

内壁は俺の精液を吸い上げるみたいに蠢き、もっと出せと言わんばかりに絞り上げていく。

ぬちゅ……♡緩慢な動きで抜き差しされ、時折弱いところを掠めるたびに情けない声を上げてしまった。

さらに浩がゆっくりと腰を回している。

「ふは……♡直のダメダメチンポもう勃起してきてんじゃん……♡どんだけ俺ン中で射精したら満足すんだよ……しょうがねえやつだなあ……♡」

「ひ、ッ……」

浩の言う通り、俺のペニスはあっという間に元氣を取り戻して硬くなっていた。恥ずかしさと悔しさで齒を食いしばる。

そんな俺を見下ろして目を細めて笑う浩が、再

び腰を振り始めた。

「ッ、あ！いま、イったばっか、あっ……！」

「何言ってんだよ、ガッチガチじゃねえか……♡
俺ン中、気持ちいいからって、情けねえ声出してん
じゃねえぞ♡直紀ッ……♡」

どちゅっ、ごちゅん、ぱんっ、ばちん！！

最初はゆっくりだったそれが徐々に速度を増し
ていき、肌同士がぶつかる音が部屋に響く。

絶頂したばかりの敏感な性器には強すぎる刺激
に俺は喘ぐが、それでも浩は止まらない。

「ほら、解るだろ……？直のクソデカチンポ、俺の
奥までずっぽり入ってんの……♡俺のマンコ気持
ちいいよなあ？」

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル 1

浩の腰を持ち上げて上から体重をかけて一気に結腸奥を突き上げる。

「おッ！ おおッ、ま、待っでえ！ なおおおッツっ！！」

「待たねえよ、無様にメス顔晒せ……」

どちゅんッ！ どっちゅっッ！ どちゅんっ！！

さっきまでの優しい甘パコから一変した、獣の交尾のように全身のバネを使って浩の奥に叩き込んでいく。

奥に入れたまま、腰をぐりぐりいっ……！♡♡と腰を回すと、ぐぷっ……♡と狭い湾曲した狭窄部が開いていく。

ここは半年前に一度しか入ったことがない、浩が主導権を握っていた間はわざと避けていたであろう、浩が過去一よがり狂った最大の弱点。

そこに、メリメリっ……♡と亀頭がこじ開けて入っていく。

「おッ♡…… ああああ あああッツ——～～♡♡♡！！」

喉を歪ませ悲鳴をあげてガクンガクンと跳ねる身体を押さえつけて、そのまま、ぐぽお……っ♡と結腸まで挿入すると、ぎゅううう……ッ♡♡とナカが締め付けてきた。

それに耐えきれず結腸奥で射精する。

「ちんぽおおっ♡びゅーびゅーっ♡あじゅいい♡おおおおおオッヅ♡♡！！」

「ッ……やば……」

ぶびゅるるるっ♡びゅうううっ——♡♡びゅぐぐっ♡

俺のチン先から結腸奥に精液が迸り、奥の奥にびちゃびちゃ♡と当たるたびに絶頂しているようで。

浩が舌を突き出しながら絶叫していた。そのトロ顔をみて、俺はまた加虐心が湧き上がるのを感じた。

ジュパジュパ♡と精液を求めるように吸い付いてくる結腸奥の愛おしくて堪らないその感触に口角が上がる。

もっといじめたい、泣かせてやりたい、めちゃくちゃにしてやりたい。

そんな衝動が溢れ出して止まらない。

「ひ、ぐっ……ああっ！？待っ、やめええっ！そこだめだってえッ！おおおおおおおッっ！♡♡♡」
「ダメじゃなくて気持ちいいだろうが」

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル2

浩も、はくはくと口を動かして深いメスイキを味わっているらしい。口の端からたらりと唾液を溢しいたので、啜りながら口づける。

「ん、ぷあ♡お、お♡しゅ、ごっ、いく、いぐっ、おおおッ♡♡」

「あー……最高、オマエ本当にかわいいなあ」

まだイッてる最中にも関わらず、腰を打ち付けてやると、獣のような喘ぎ声を上げる。

それがまた可愛くて、何度も同じ場所を責め立てた。

痙攣しながら、中イキを繰り返しているらしい。
「ふぁ♡じゅっと、イってううっお♡あ、んんうっ♡なお、お♡んんゾっ♡♡」

「ほらっ、イけよっ……イキまくって、アへ顔晒せよっ……」

「や、だぁっ……♡はずかじいっ♡おっ♡おお♡みないれええっ♡♡」

「トロ顔も全部可愛いから安心しろよっ……」

「ほん、とお……？」

頭を撫で回しながら、可愛い可愛いって何度も伝えたと、浩の顔が更に蕩けてきた。

無意識にか舌を差し出すようにキスをねだってきたので、舌を食べるみたいにしてまた唇を合わせ、今度は上から覆い被さるような体勢になって、もっと深く繋がる。

「ん♡ん、うっ♡ふ、ぁっ……直っ♡ん、っ……おっ♡ふか、いいっ♡おおっ♡」

「あー……すっげえ、かわいー……♡」

素直に反応して可愛いご褒美に、浩が好きな結腸口ぶちゅぶちゅ♡って亀頭でこねくり回す。

ぢゅううっ……♡って舌を強く吸ってやると、肉壺がまたぎゅうっ♡ぎゅうっ♡って俺のモノを締め付けてきて、またメスイキしたことを知らせてくる。

「あっ♡あ～～ッヅ♡いぎっぱなしい♡きもちいい♡なおおお♡」

「浩、好きだっ……」

「おれもお♡なおしゅき♡ちんぼしゅきいい♡んあ、♡あああおッー♡」

完全に理性を無くした獣みたいに叫び喘ぐ浩が愛おしくて、俺も恋人を可愛がることしか考えられないケダモノになってしまう。

浩の薄い腹が俺のチンポが入り込んだことで少しぽこっと盛り上がっていて、掌で押し込みながら抽送するとびくびくって大きく浩の身体が跳ねた。

「んお♡おおお♡しゅごっ♡おおお♡」

「ほら、っ……ちゃんと、俺のちんぽで気持ちよくなってるとこ、しっかり見せろよ」

「ああああ♡ずぽずぽっ、してうううっ♡♡おれのけつまんこお♡なおのちんぽでっ……ぐちゃぐちゃにされてええっ♡♡」

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル3

ふっくらとした縦割れのアナルから、たらりと透明な液体が溢れてくる。それを指で掬うと穴がきゅうって窄まった。

「一人で、シたのか？」

「う、ん……あ、あっ……直紀が大変じゃないようにちゃんと用意してきたから、すぐ挿れられると思う」

恥ずかしそうに頷きながら足を抱えて、その小さな穴を指でにゅば……♡と開いた。

ヒクヒクと物欲しそうにしているそこに、唾を飲む。

思わずむしゃぶりつきたくなる衝動を抑えて、指先を挿入した。

「んあ、あっ、あううっ……♡」

中は熱くて柔らかくて、指に吸い付いてくるようだ。ゆっくり抜き差しすると、ちゅぽっ♡ちゅぽんっ♡と音を立てて指が引き抜かれていくのがエロい。

「は、指……しな、くても、入るからっ……直紀い……♡」

「そうみたいけど、もうちょっと弄らせろ」

もう一本指を増やしてもすんなり入っていくし、柔らかい。中でピースするように広げてやると恥ずかしそうに声を漏らす。

二本の指を腹側に曲げると、ちょうどちんぽの裏側辺りでコリコリとした感触に当たる場所があるのがわかる。そこをぐっと押し込んでやると、腰を浮かせてビクビク震えた。

「あああ～っ……♡そこおっ……ああ、ああっ♡う、あ……はずかしいっ……♡なか、俺のなか、んあっ……あ、指っ……ん、んうっ……♡」

「前立腺大好きだもんな」

「う、ううっ♡だい、す、きい……♡」

指先でこりっこりっと何度も刺激してやると、腰を揺らしながら喘ぎ声を上げる。

浩の中はすっかりとろとろになって熱くうねっている。

これなら大丈夫かと思い、ズボンの前を寛げてすっかり硬くなったモノを取り出す。

それを見た浩はごくりと唾を飲み込んだのがわかった。

「は……あう……♡」

ぴたりと先端をくっつけてやると、早く入れて

ほしいと急かすように吸い付いてくる。

焦らすように、先端で入り口を擦ったりして遊んでいると浩の息が浅くなっていく。

「はっ、はぁっ……♡直紀い……直っ……♡」

「俺のチンポ欲しい……？」

耳元で囁くように言うところこくと頷く。耳まで真っ赤にしているのが可愛い。

「う、んっ……♡ほし、いっ……直紀のちんぽっ……ちょーだい……♡」

甘い声が俺の脳髓をしびびと痺れさせていく。
あー、ほんっとかわいいなこいつ。

そのまま耳に舌を這わせたり甘噛みしたりしながらゆっくりと挿入していく。

ぐぶっ♡ずぶぶっ♡♡ずぶぶぶっ……♡♡

中に埋め込んでいくと、熱い内壁が包み込んでくる。浩の肉襞をかき分けるようにして進んでいく。一番太い部分を飲み込むと、あとずぶずぶっと奥に進んでいって、浩が嬉しそうな声を上げた。

「んあ、ああああ……♡直紀のちんぽっ……♡太くておっきい……♡」

あー……やっべえなこれ。

浩の方も気持ちいいみたいで、口端から涎が垂れている。

目の中に♡があるみたいになってるんじゃないかっていうくらいトロ顔になっている浩を見て、もう限界だった。

一気に奥まで突き入れると、浩は背中を反らせて喘ぐ。

「あ、ああああっ～～♡んあ……ああっ……あうっ♡」

「は——……もうイってんのかお前」

「んっ、んうっ♡」

熱い肉壁に包まれて、それだけで射精してしまいそうになるのをなんとか耐える。

浩のなかは狭くて熱い。馴染むのを待とうと動きを止めても、内壁が優しく陰茎を揉んでまるで搾り取るかのように蠢いて俺を歓迎してくれるみたいだ。

俺が入ってきたことが嬉しくてたまらないとばかりに絡みついてくる腸壁が気持ちいい。

ぎゅうぎゅう締め付けてくる中をゆっくりと引き抜いて、また奥まで叩き付ける。

「らめ、今っ……イったばかりっ、んあ♡んんうっ～～♡」


「ごめんなあ、とまってやれそうにないんだわ」



ご注意

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などには一切関係ありません。


本作のイラスト、小説の複製、無断転載、無断アップロード等を許可なく行うことは固く禁止させていただきます。



「俺はメスガキ♂（恋人）を催淫アプリ
でわからせ調教したい」

イラスト 蒼河童(@ao_kappa_830)

小説 宮代あかこ(@a_ka_ko)



連絡先 <https://lit.link/akak0>
akako.sivash@gmail.com